

植物に関する二、三

和田 清

K.Wada : A few things about plant

1月例会(122回)の折り「87年植物雑考」と題して、感想やら身辺のできごとを紹介した。

1. 植物誌に関すること—標本採集者を大切に—

今まで私は狭い地域だけの標本を採り、調査に必要なときのみ植物採集をしていたので、このような大がかりな標本に接することは初めてのことであった。やっと重い腰をあげて担当分を借り出し、やゝ興奮ぎみに何日か眺めていた。それは、これだけ広い県内で、よくも同じ種が同じ形をしているものかと感心し、逆に、同種と言われながらも少しずつ変異のあることにも驚かされた。

それにしても、机に座ったまゝで長野県じゅうの標本に接することができるのは、これは採集者のおかげである。一枚か二枚の採品であっても、県内各地から集まると大きな「こと」を成す。とかく陰になりやすい、採取者を忘れてはなるまい。今回の植物誌では、このような方々の協力をぜひ活かせるような内容にしていだきたいものと思っている。

2. 中国の旅から—緑の並木を—

昨年秋、中国大陸へ駆け足旅行に出かけた。これは、中山冽氏が会誌19号に訪中記を寄稿していることと全く同じ内容のツアーであり、ただ違ったのは年と季節が少し早く、ポプラ等はまだ緑葉をつけていたことであった。

詳しくは同氏の報告を参照されたいが、私は中国大陸になぜ森林が欠けているのか、この目で確かめたかった。教科書では、夏緑樹林帯に含まれる地域である。中国文明の悠久の歴史を目の当たりにし、私なりきの推論を試みたがこれは例会の折り配布した小文に書き記しておいた。

中山氏が指摘しているように、行けども行けどもポプラ並木の連続でうんざりしたが、北京の空港通りの緑の並木には目を見張った。樹種はともかく、これだけの並木を長野ではつくれるだろうか。この通りの並木について東山魁夷画伯が、昭和52年に次のように書いていることを最近になって知った。

『北京空港に降り立った私は、市の中心へと向う車の中で、三十キロにも及ぶ広い並木道に、まず、驚いた。丈高い柳、ポプラ、槐などが道の両側にそれぞれ四、五列に植えられている。解放後に植

えたということであるが、この二十五年間に、よく育っていて実に見事である。もう十年たてば、並木道と言うより森の中を走る道の趣となることだろう。』(緑の並木道から抜粋)

私が訪ねたのは、東山画伯が言うちょうど10年後であった。何とか信州にも並木が育たないだろうか。だめなら平地林でもよい。身近かな緑を復元してほしいと、強く願っているものである。

3. ブナ林保護運動—ブナの植樹を—

各地のブナ林の保護運動は、大変な努力ではあるが、それぞれに成果があげられている。かつてのように、どこでも無闇に伐るということには歯止めがかけられてきた。そこでもう一つ、ブナの苗木を植えようということである。

広葉樹のドングリ播種の運動は、県内では軽井沢や松本などで行われている。菅平の林一六氏は、研究用にブナを植えて測定し続けている。土田勝義氏のご教示によれば、石川県の八神徳彦氏は「苗木植栽によるブナ林復元の研究」を報告しているし、その参考文献の中にもいくつか類似のものが見られる。北海道では自然分布の北限地、黒松内以北でも何箇所かのブナ植樹の記録が残っている。

昨年ブナを植えようと呼びかけたところ、ワッペンまで作って熱心に取り組み出したグループが「戸隠を知る会」である。戸隠高原(海拔1200m)に山荘を持つ人たちが中心になって、山小屋の周りにブナを植えたいと始まった。この反響は意外に大きく、例えば長野市内の小学校の児童たちは、作文に基金まで添えて応援してきた。

後日、清水建美氏から「遺伝子保存」の件でご指摘を受けた。確かに重要なことである。以前、志賀の植物園に関係したとき、オオヤマザクラを植樹しようとしたが当時は北海道にしか苗木がなく、導入してよいものかどうか、結局断念したことがある。岩手県ではブナの植林運動をしているが、今回の試みは決して大それたことを考えているわけではない。清水氏の言う単なる緑化である。しかし、記録はきちんと残すことが必要である。できればその近辺から苗木を入手したいのだが、これが現在のところ難題となっている。